

第1講

5世紀から10世紀へ：神様が「仏様はじめました」
－仏教はいかにして日本に受け入れられていったのか－（2015年度第1問）

日本列島に仏教が伝わると、在来の神々への信仰もいろいろな影響を受けることとなった。それに関する次の(1)～(6)の文章を読んで、下記の設問A・Bに答えなさい。

- (1) 大和国の大神神社では、神体である三輪山が祭りの対象となり、のちに山麓に建てられた社殿は礼拝のための施設と考えられている。
- (2) 飛鳥寺の塔の下には、勾玉や武具など、古墳の副葬品と同様の品々が埋納されていた。
- (3) 藤原氏は、平城遷都にともない、奈良の地に氏寺である興福寺を建立するとともに、氏神である春日神を祭った。
- (4) 奈良時代前期には、神社の境内に寺が営まれたり、神前で経巻を読む法会が行われたりするようになった。
- (5) 平安時代前期になると、僧の姿をした八幡神の神像彫刻がつくられるようになった。
- (6) 日本の神々は、仏が人々を救うためにこの世に仮に姿を現したものとする考えが、平安時代中期になると広まっていった。

設問

- A 在来の神々への信仰と伝来した仏教との間には違いがあったにもかかわらず、両者の共存が可能となった理由について、2行（60字）以内で述べなさい。
- B 奈良時代から平安時代前期にかけて、神々への信仰は仏教の影響を受けてどのように展開したのか、4行（120字）以内で述べなさい。

解いてみましょう (第1講) Aについて

1 問われている (求められている) ことを確認する。

ア

について書く。

イ

について書く。

ウ 2行 (60字) 以内で書く。

2 資料の内容と教科書 (プリント) の記述を照らしあわせる。

※ ア

などには教科書や資料から抜き出した語句を、

キ

など二

重線の枠には、考えて「決めぜりふ」などを入れます。

(1) 資料(1)に関して

教科書の



在来の神々への信仰は、

ア

に由来し、元来

イ

だった。

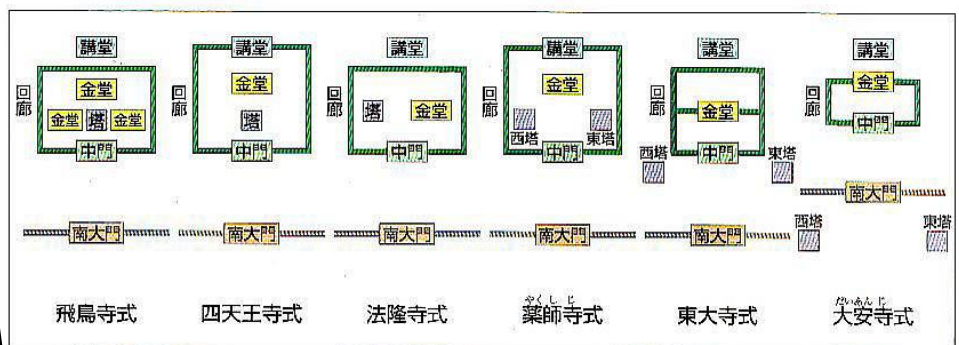
(2) 資料(2)に関して

教科書の



<伽藍配置の類型>

はじめは釈迦の遺骨と伝えられる仏舎利を安置する塔が伽藍の中心であったが、しだいに本尊をまつる金堂が中心的位置を占めるようになった。



■ 伽藍配置の類型 はじめは釈迦の遺骨と伝えられる仏舎利を安置する塔が伽藍の中心であったが、しだいに本尊をまつる金堂が中心的位置を占めるようになった。(実教『日本史B』37ページ)



信仰の対象となる釈迦の遺品（遺骨）を祭るもの=塔を中心とする **ウ**

祭られる対象となる祖先の遺品（副葬品）を納めるもの=石室を中心とする **エ**



エ の役割と **ウ** の役割とが混同されている（かぶせられている）。



教科書の 37 ページに「 **ウ** の建立は **エ** にかわって豪族の権威を示すものとなった。」

さらに

教科書の



まつられる神々の中には **オ** も含まれるようになった。

抜き出したものをまとめる

在来の神々への信仰は、 **ア** に由来し、

元来 **イ** だったことに加えて、 **オ** を

カ という **エ** が担ってきた役割を

ウ が **キ** から。

3 60字にまとめる

解いてみましょう（第1講）Bについて

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア について書く。

イ について書く。

ウ 4行（120字）以内で書く。

2 資料の内容と教科書（プリント）の記述を照らしあわせる。

(1) 資料(3)と資料(4)に関して

教科書の



ア には、イ の建立や

ウ などのエ の風潮が見られた。

(2) 資料(5)に関して

教科書の



オ には、エ を反映して

カ のキ が盛んにつくられるようになった。

(3) 資料(6)に関して

教科書の



ク になると、エ が進んで、
ケ とする
コ も生まれた。

抜き出したものをまとめる

ア には、イ の建立や ウ
などの エ の風潮が見られ、 オ には、
カ の キ が盛んにつくられた。
ク になると エ はさらに進んで、
ケ とする
コ も生まれた。

次のページからは、「問われている（求められている）ことを確認する」と「関連する教科書のページと内容」が記されています。
自力で正解を求めたい方は注意してください（8ページへ進んでください）。

解いてみましょう（第1講）Aについて【謎解きのヒントです】

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア 在来の神々への信仰と仏教の共存が可能となった理由

について書く。

イ 違いがあったにもかかわらず共存できた理由

について書く。

2 資料の内容と教科書（プリント）の記述を照らしあわせる。

(1) 資料(1)に関して

教科書の 31 ページの4～6行目 と 脚注①



人びとは、円錐形の整った形の山や高い樹木、巨大な岩、絶海の孤島、川の淵などを神のやどるところと考え、祭祀の対象とした。それらのなかには、現在も残る神社につながるものも少なくない。

三輪山を神体とし、拝殿のみで本殿のない奈良県大神神社（略）などでは、いずれも古墳時代の祭祀遺跡が発見されており、古墳時代以来の祭祀が続いていることが知られる。

(2) 資料(2)に関して

教科書の 36 ページの脚注②



飛鳥寺の発掘調査では、塔の心礎から古墳の副葬品と同種の品が出土し、在来の信仰と習合する形で仏教が導入されたのが知られた。

さらに

教科書の 31 ページの7行目



氏の祖先神（氏神）をまつることもおこなわれるようになったらしい。

解いてみましょう（第1講）Bについて【謎解きのヒントです】

1 問われている（求められている）ことを確認する。

ア 奈良時代から平安時代前期にかけての内容

について書く。

イ 仏教の影響を受けて、神々への信仰がどのように展開したのか

について書く。

2 資料の内容と教科書（プリント）の記述を照らしあわせる。

(1) 資料(3)と(4)に関して

教科書の 57 ページの 17 行目 と 66 ページの 1～3 行目



仏と神は本来同一であるとする神仏習合思想がおこった。

8世紀頃から、神社の境内に神宮寺を建てたり、寺院の境内に守護神を鎮守としてまつり、神前で読経する神仏習合の風潮がみられたが、平安時代に入るとこの傾向はさらに広まっていった。

(2) 資料(5)に関して

教科書の 66 ページの 16～19 行目



神仏習合を反映してさかんになった神像彫刻としては、薬師寺の僧形八幡神像・神功皇后像などがある。

(3) 資料(6)に関して

教科書の 73 ページの 22～23 行目 と 脚注③



神仏習合も進み、仏と日本固有の神々とを結びつける本地垂迹説も生まれた。

神は仏が仮に形をかえてこの世に現れたもの（権現）とする思想で、のちには天照大神を大日如来の化身と考えるなど、それぞれの神について特定の仏をその本地として定めることがさかんになった。

一見、これで出来たようですが、東大日本史の特徴は「歴史の本質をとらえなさい」というメッセージが込められています。

教科書の 73 ページの脚注③の後半部分に注目してください！

実は、次のページからが本当の謎解きのコーナーになります。
新しい資料（教科書には掲載されています）の使い方も示されます。

ここから、本当の謎解きのコーナーとなります。

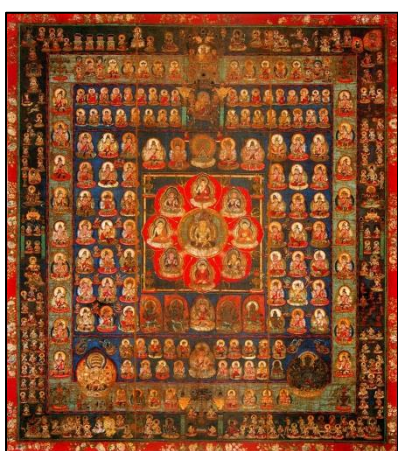
教科書の **73 ページの脚注③の後半部分**

のちには天照大神を大日如来の化身と考えるなど、それぞれの神について特定の仏をその本地として定めることがさかんになった。

Aの問題をもう一度見てください。
本来、日本の在来の神々とはどのようなものだったか。

ア に由来し、元来 **イ** 。

それが、それぞれの神について特定の仏をその本地として定めることがさかんになった。
平安時代初期には、日本仏教界に大きな改革の波が訪れました。



<曼荼羅 (まんだら)>
「大日如来を中心とした密教の仏教世界を構図化した曼荼羅で、金剛界と胎蔵界が一体として伝えられている。」
(山川『詳説日本史』P67 の解説)
↓
具体的には：天照大神は大日如来、八幡神は阿弥陀如来、薬師如来、素戔嗚尊は薬師如来、大国主命は大黒天・・・

ア に由来し、元来 **イ** 。

神々は、仏教をもとに **サ** 。

抜き出したものをまとめる

ア には、**イ** の建立や **ウ**

などの **エ** の風潮が見られ、**オ** には、

カ の **キ** がつくられた。

ク になると **エ** はさらに進んで、

ケ とする

コ が広まり、**ア** に由来し、元来、

イ 神々は、仏教をもとに **サ** 。

< ここに注目！ 「本地垂迹説の持つ意味」 >

2001年にNHKのスペシャルドラマ『聖徳太子』が放送された。その中で、物部守屋との戦いで追い詰められた蘇我馬子（緒形拳）が、持っていた小さな仏像を投げ捨てて「何だこんなもの。あんなに朝晩に祈ったのに、助けてくれないじゃないか。」と言う場面があった。仏教が伝来した（538年）ころ、人々が仏教をどのように受け止めていたかがよく表されていたと思う。あくまでも祈る対象であり、御利益があるもの、言い換えれば八百万の神の一つだったのである。今回の東大の設問Aは、そのことを正面からとらえたものである。

本来の仏教思想を初めて理解したのは、「世間虚仮唯仏是真（せけんはこけなり、ただほとけのみこれまことなり）」、つまり「この世にある物事はすべて仮の物であり、仏の教えのみが真実である」と言ったとされる厩戸皇子（聖徳太子）であろう。

豪族が私的に信仰していた仏教が、国家をあげて信仰されるようになっていく中で、神仏が習合していったのも、フレキシブル（柔軟な）日本の神々への信仰から考えると不思議なことではなかった。クリスマスを祝うことができるのもそのためである。八百万の神は共生できるのだから。

しかし、さらに仏教が隆盛していくと、神々と仏との整合性が問題となってきた。そこで「日本の神様は、実はインドの仏様だったのだ。仏様を知らなかった日本人が、それを神様だと思ったのだ。」と解釈する本地垂迹説が登場したのである。そして、「この神様は、実はこの仏様」と、それぞれ当てはめていった。

フレキシブルな日本の神々とは異なり、仏教は体系的なものである。

かくして、自由な個人経営者であった神々は、外資系大企業の社員にさせられたのである。

まとめ

正月には神社へ、盆には寺院へ、そしてクリスマスツリーも飾る日本人は、外国人にとって「何を信仰しているのか？」と奇異にうつることがある。